

令和4年度事業報告(音楽)

自 令和4年4月 1日
至 令和5年3月31日

公益目的事業3(顕彰事業)

1. 「第53回サントリー音楽賞」「第21回佐治敬三賞」(2021年度)の贈賞

第53回サントリー音楽賞の濱田芳通氏、第21回佐治敬三賞の「オーケストラ・ニッポニカ第38回演奏会 松村禎三交響作品展」及び「オペラ『ロミオがジュリエット』世界初演」への贈賞式を7月13日(水)15:00よりサントリーホール ブルーローズ(東京都港区)にて開催し、賞金700万円(サントリー音楽賞)、各100万円(佐治敬三賞)を贈呈。

贈賞式にひきつづき、新型コロナ感染拡大防止のため、着席にて受賞関係者のみで祝賀パーティを開催した。

2. 「第54回サントリー音楽賞」(2022年度)の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和5年1月8日(日)に、選考委員7名による第54回「サントリー音楽賞」の第1次「候補者選考会」を芸術財団会議室に於いて開催した。
- (2) その結果、2022年にわが国の洋楽の発展に優れた業績をあげた人々として、候補者を選定した。
- (3) 引き続き3月12日(日)に「受賞者選考会」を芸術財団会議室に於いて開催した。選考委員7名による慎重な審議の結果、第54回サントリー音楽賞に、井上道義氏が選定された。
- (4) 3月27日(月)に開催された理事会において、正式に第54回「サントリー音楽賞」は、井上道義氏に決定した。

イ. 贈賞理由

若くして頭角をあらわし、今年で77歳になるという年齢ならば、もはや「重鎮」や「巨匠」と呼ばれてもおかしくないのだが、井上道義をそんなふうと呼ぶ人はほとんどいない。これだけの活躍をみせながらも、その存在は強く未来を感じさせる。いまだに「若手」のようなのだ。泰西名曲をしっかりとあげ一方、現代作品の開拓にも余念がない。あるいは、あえて道化のようにふるまいながらも、その音楽は実直で正統的。そんなさまざまな矛盾が、時として彼を異端のようにも見せてきたわけだが、しかし近年の演奏においては、その矛盾がいわば豊潤へと変化を遂げ、ゆたかに実っているように感じられる。

とりわけ2022年は、ショスタコーヴィチ作品において、スペシャリストならではの充実ぶりをみせた。2月に「交響曲第5番」(読売日本交響楽団)、「第15番」(オーケストラ・アンサンブル金沢)、「第1番」(東京フィルハーモニー交響楽団)、3月には「第8番」(名古屋フィルハーモニー交響楽団)、11月に「第10番」(NHK交響楽団)といった具合。鬼気迫るラインナップでは

ないか。さらに藤倉大の新作「Entwine」(読売日本交響楽団、1月)、クセナキスの「ケクロプス」(東京フィルハーモニー交響楽団、2月)、そして伊福部昭の「シンフォニア・タブカーラ」(NHK交響楽団、11月)など、重量級の作品をこなすとともに、オール・プロコフィエフ・プログラム(兵庫芸術文化センター管弦楽団、4月)、偽作をあえて並べて見せた「モーツァルト+」(神奈川フィルハーモニー管弦楽団、5月)など、凝ったプログラミングも冴えわたっており、さらに年末にはNHK交響楽団とのベートーヴェン「交響曲第9番」で、なんともふくよかで、どこか懐かしい音の大伽藍を築いて見せた。これだけ骨のある活動を続けてきた指揮者は他に見当たらない。

以上の理由をもって、井上道義に第54回サントリー音楽賞を贈ることを決定した。

ウ. 選考委員 岡田暁生、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、沼野雄司、船木篤也、松平あかね
の7氏

エ. 賞金 700万円

オ. 贈賞 令和5年7月11日(火) サントリーホール ブルーローズ(予定)

3. 「第22回佐治敬三賞」の選定

ア. 選考過程

- (1) 令和3年10月1日～11月30日および令和4年4月1日～5月31日の2回の募集期間に、令和4年1月1日～12月31日(上期、下期)に実施される音楽公演についての応募を受け付けたところ、72企画についての応募があった。応募公演について選考委員8名が分担し公演の視察を行った。
- (2) 令和5年2月12日(日)、第22回選考会を芸術財団会議室にて開催し、選考委員8名による慎重かつ白熱した審議の結果、第22回「佐治敬三賞」受賞公演に、「北村朋幹 20世紀のピアノ作品(ジョン・ケージと20世紀の邦人ピアノ作品)」が選定された。
- (3) 3月27日(月)に開催された理事会において、上記公演を正式に第22回「佐治敬三賞」の受賞公演に「北村朋幹 20世紀のピアノ作品(ジョン・ケージと20世紀の邦人ピアノ作品)」が決定した。

イ. 公演概要・贈賞理由

<公演概要>

名称:「北村朋幹 20世紀の邦人ピアノ作品」

日時:2022年10月9日(日)15:00

会場:滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 小ホール

曲目:

武満徹/2つのレント(1950)

福島和夫/水煙(1972)

柴田南雄/ピアノのためのインプロヴィゼーション第2番 no.31(1968)

八村義夫／彼岸花の幻想 op.6(1969)

松村禎三／ギリシャによせる二つの子守歌(1969)

甲斐説宗／ピアノのための音楽(1974)

石井眞木／ブラック・インテンション IIIー息のためのピアノ練習曲ーop.31(1977)

出演:ピアノ 北村朋幹

主催:滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

(関連企画)

名称:「北村朋幹×ジョン・ケージ」

日時:2022年10月8日(土)11:00/14:00(2回公演)

会場:滋賀県立美術館 エントランスロビー(入場無料)

曲目:ジョン・ケージ／プリペアド・ピアノのためのソナタとインターリュード(1946-48)

出演:ピアノ 北村朋幹

主催:滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール

共催:滋賀県立美術館

<贈賞理由>

「北村朋幹 20世紀のピアノ作品(ジョン・ケージと20世紀の邦人ピアノ作品)」は滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール 小ホールで行われた「20世紀の邦人ピアノ作品」と題された演奏会(10月9日)と、その関連企画として滋賀県立美術館エントランスロビーで開催された「北村朋幹×ジョン・ケージ」という演奏会(10月8日)で構成されていた。メインはびわ湖ホールでの演奏会であるが、北村にとって後者におけるケージの《プリペアド・ピアノのためのソナタとインターリュード》全曲は邦人ピアノ曲と時空を超えて応答し合う関係なのではなかったろうか。

武満徹の《2つのレント》に始まり、福島和夫《水煙》、柴田南雄《ピアノのためのインプロヴィゼーション第2番》、八村義夫《彼岸花の幻想》、松村禎三《ギリシャによせる二つの子守歌》、甲斐説宗《ピアノのための音楽》と続き、石井眞木の《ブラック・インテンション IIIー息のためのピアノ練習曲ー》に終わる、1960年代から70年代の作品を中心とした演奏会は、アンコールに演奏された高橋悠治の《秋のオーロラ CANTO I》を含めて実にさまざまなスタイルとアイデアを盛り込んだものであった。アンコールの高橋以外はすべて故人となった作曲家たちのピアノ曲を、こうした形でまとめてプログラム化するピアニストは、21世紀の現在そうはいない。そして、それらはかつて作曲家たちが存命中に頻りに採り上げられていたころの演奏とはまったく異なったもの、すなわち不可視の歴史の襞を確実に感じさせつつも、時間の距たりのなかで変容してきた、純粹に今の視点から捉え直された作品として、どれもこよなく新鮮に響いた。作曲当時のアイデアを超えて、作品が新たな生命を吹き込まれつつ、不死性へと架橋された瞬間を聴き手は目の当たりにしたろう。石井作品では舞台上でのピアノのプリペアド(弦の間にねじやゴムを挟み、特殊な音響を作り出すこと)をも演奏の一部として感じさせながら、内省的で濃厚な時間の持続を途切れさせることなく、いわば北村自身の高密度の宇宙を描くような演奏会は聴き手に強いインパクトを

与えた。関連企画として行われたジョン・ケージ作品の演奏会は、オープンな空間で出入り自由の公演であったが、各回100人ほどの聴衆が各々の角度から聴き入り、誰も出ていこうとしなかった。事前に慎重に行われていたピアノのプリペアは、それ自体が「解釈」であり、同時に「演奏」の一部だったと言えるだろう。澄み切って、同時に深みのあるタッチで長大な作品が克明に描き出され、特に後半はひたすら演奏の集中力が増していくのが感じられた。今という時間上にある日本だからこそ生まれ得た思索的な演奏であり、北村の創り上げる宇宙はここでもひとびとを魅了してやまなかった。

ウ. 選考委員 伊藤制子、伊東信宏、片山杜秀、白石美雪、長木誠司、野々村禎彦、船木篤也、水野みか子 の8氏

エ. 賞金 200万円

オ. 贈賞 令和5年7月11日(火) サントリーホール ブルーローズ(予定)

4. 第32回「芥川也寸志サントリー作曲賞」の選考、決定、贈賞

2021年に初演された新進作曲家の管弦楽作品の中で最も清新かつ豊かな将来性を内包する作品を選定。最終選考はサマーフェスティバル2022の一環として、公開の場で行った。

第32回「芥川也寸志サントリー作曲賞」選考演奏会

8月27日(土)15:00～ サマーフェスティバルの一環として開催。

第30回受賞記念委嘱の小野田健太氏作品を初演したのち、候補作品を演奏した。

演奏終了後、3人の選考委員が公開による選考を行って、1曲を選定し、第32回「芥川也寸志サントリー作曲賞」(150万円)を波立裕矢氏作曲の『『失われたイノセンスを追う。II』オーケストラのための』に決定、贈賞した。

選考委員は、酒井健治、福士則夫、山根明季子の3氏。選考会司会は沼野雄司氏。

なお、受賞作曲家には新作を委嘱(委嘱料100万円)し、完成後当財団主催演奏会で初演する。

公益目的事業4(助成事業)

1. 佐治敬三賞推薦コンサート活動

2019年の財団50周年を機に、佐治敬三賞応募公演の中から、一部を紹介し、実際に聴いてもらう機会を提供するために、佐治敬三賞推薦コンサートとして選定、チケットプレゼントを行っているが、令和4年度は、第22回佐治敬三賞応募公演のうち令和4年4～12月開催公演および第23回の一部(令和5年1～3月開催分)の推薦された26公演を、ホームページなどで告知し、抽選により各公演10名を招待した。

2. 学生向け楽器貸与

世界的文化遺産である弦楽器名器を保全し次世代に継承するとともに、若手音楽家の育成、

クラシック音楽の発展に貢献することを目的に、学生向け楽器貸与を行った。

9年目となる本年度は、みなとみらいホール 小ホール(横浜市)にて実施された全日本学生音楽コンクールバイオリン部門(主催:毎日新聞社)中学校の部(11月27日)、高校の部(11月28日)にて、選定委員が第9回「サントリー芸術財団名器特別賞」受賞者を選定した。

3年間の無償貸与を令和5年1月より開始。

【第9回サントリー芸術財団名器特別賞受賞者および貸与楽器】

中谷哲太郎 GENNARO GAGLIANO(1774年製)

【選定委員】

梅津時比古(毎日新聞社 特別編集委員)

山之内郁治(毎日新聞社 事業本部 企画・文化事業部長)

石井志都子(音楽家、全日本学生音楽コンクール諮問委員)

藤原浜雄(音楽家、桐朋学園大学院大学教授)

前橋汀子(音楽家)

福本ともみ(サントリー芸術財団専務理事)

3. 演奏家向け楽器貸与

貸与楽器および貸与者(継続)

平成30年から令和4年度まで5年間の貸与予定であった貸与決定者への楽器貸与を1年間継続。

①ANTONIO STRADIVARI(1727年製作 バイオリン)ー米元 響子

②PAOLO ANTONIO TESTORE(1728年製作 ヴィオラ)ー田原 綾子

4. その他の助成

ア. 活動助成

(1)音楽文献目録委員会 音楽文献目録出版に対して

(2)ミュージック・フロム・ジャパン 国際音楽祭開催に対して

(3)東京国際ヴィオラコンクール実行委員会

イ. 運営助成

(1)日本作曲家協議会

(2)日本現代音楽協会

(3)日本演奏連盟

公益目的事業5(出版事業)

「日本の作曲 2020-2021」の刊行

50周年記念出版「日本の作曲 2010-2019」の続編として、これまでの10年ごとであった制作を2年ごとに変更。令和4年度に発行予定であったが、コロナの影響により発行を1年後ろ倒した。

以 上